

指定市以外の市町村が行う 歩道の新設等について

道路局路政課

なにやら気がかりな夢から目がさめると、また一晚、路政課で過ごしたことを思い出した。背もたれを倒して寝ていたぼくには、いつの間にか毛布がかけられていた。室内の照明は消えていて、冬の冷たい朝陽がブラインドの隙間から課内を照らしている。黒表紙や昭和二〇年代の資料のほこりが散っていて、それが陽光に照らされているとダイヤモンドダストのようにも見える。パソコンのディスプレイが光を反射していて、とてもまぶしい。ぼくはそう思った。

「メリークリスマス。おはよう。マコト。」
デスクの上につまれている資料の間から、マリコが覗き込んでいる。逆光で目を細めながらこちらを見ている。左ほほのえくぼがまぶしい。右の耳に髪をかけるしぐさをしながら、微笑んでいる。

「おはよう。君も結局泊まったのか。」
「そうよ、しばらくあなたの寝顔を見ていたの。」

「なんだかジャガイモみたいでかわいいんだもの。」
自分で言っておかしくなったのか、マリコは口元をおさえながら静かに笑った。ぼくもつられて笑った。マリコが笑っているのを眺めていると、眠る前の嫌なことはすべて忘れられるような気がした。マリコは総括班の係員で、僕とは同じ歳。今年、二九になる。朝陽に照らされたその顔を見て、地球の半分が夜になるこの瞬間、ぼくだけがずっとこの朝が続くんじゃないかと思った。ぼくにとって、マリコは特別な存在である。

「あの方に代わって、ぼくが君のことを守っていいと思う。」

「あの方って、カミサマとかホトケサマとかのこと？ マコトが代行するの？」とマリコは言った。
「そう。代理じゃなくて代行だから、神様の指揮監督権は及ばないし、代行している以上、もともと

と全治について全能なカミサマやホトケサマでも

権限は行使できないんだ。だから、ぼくだけが君のことを守るということになる…、という夢を見ていた気がする。」

「まじめな顔でぼくがいうと、マリコは笑った。
「でも、それじゃ代行についてはカミサマと協議して決めたってこと。」

「そうだよ。これからそうするって協議して決めたんだ。そして協議は成立した。どのような権限を行使するかは、これからまた話し合う。」

「なんだか、指定市以外の市町村みたいね。」とマリコは言った。

ぼくは、いつか、こころに決めていたことを思い出していた。

ぼくとマリコとの関係は、マリコの母親の葬儀の一週間くらい後から始まった。いまから一年半前のその日、マリコは気丈に振舞っていた。母親の死という現実の前に、変わったような雰囲気は一切ないように、みんなには見えていたようだが、ぼくはマリコの変化には気がついていなかった。職場で目が合うたびに、屈託のないチャーミングな笑顔をぼくに向けていたいつものマリコは、そこにいなかった。遺族としてぼくたちを迎えるとき、彼女のいつもの左ほほのえくぼはみえない。「ありがとうございます。」

マリコは儀礼的にとでも短く答えた。

次の日、マリコは普段とかわらない姿で職場に
来た。そして、いつものように淡々と仕事をこな
していた。とりわけ、平成一九年の道路法改正の
通達集を作っていたようだ。何日か休んだせいか、
マリコの仕事はとてまたまっているようだった。
とても忙しそうに動き回っていた。二三時を過ぎ
ても、マリコは帰宅した様子がなかった。

日付が変わる頃、有料道路課に資料を取り立て
にいったぼくは、それを補佐に報告するため、コ
ピーをとり交通管理課にいった。路政課と交通
管理課へは課内でつながっている。全員帰ったの
だろうか、照明は消え、コピー機だけがぼうつと
光っていた。そして、つまれたコピー用紙に腰か
け、マリコがとても静かに泣いていた。

「ごめん。」

マリコはあわてて涙を拭いて、ぼくに笑顔を向
けた。

「わたしこそ、ごめんなさい。誰もこないと思っ
て。」

「いいんだよ。路政課のコピー機使うから。」

ぼくは、いつまでも残っている補佐を飲みに誘
った。ぼくたちがいたら、きっとマリコは出てこ
られないと思ったから。補佐はふだん反抗的なぼ
くが飲みを誘ったことを、無邪気に喜んだ。ぼく
は、マリコのデスクに、ぴったり一〇〇曲入った
i-podを置いていった。そして、『たくさんの歌を

聞いたら。何か気がまぎれるかもしれないよ。そ
んで指定市以外の市町村は車道系の権限は代行で
きないよ。なにしろ、歩道の新設等しかできない
からね」とメモを書いておいた。

今にして思えば、相応しくない歌もたくさん入
っていたかもしれない。でも、マリコはしばらく
してから、ぼくの机の中にそれを返してくれてい
た。とても長い手紙が一緒に添えてあった。

手紙には、入っていた曲の中にもとても気に入
たものがあつたこと、泣いているのが見つかつて
すこし恥ずかしかったこと、とても励まされたこ
と、市町村が国道又は都道府県道において歩道の
新設等を行った後の、当該歩道等の敷地の帰属に
ついては国道の場合は国に帰属し、都道府県道の
場合は代行するかしないかの協議の時にあらかじめ
決めておくべきことであること、そして今度ゆ
っくり二人で話したいということが書いてあつ
た。

そして、ほどなく、ぼくたち二人は仕事帰りに
飲みに行った。そのときは午前二時を回っていた
と思う。

店には他の客は一人しかいなかった。姿勢のい
いバリツとしたスーツの初老の男が、カウンター
の一番奥にいた。グラスに残ったわずかなウイス
キーが、長い時間、彼がそこにいたことを想像さ
せた。ぼくたちは、その姿勢のいい初老の男から

ちようど三つはなれたツールにらんで腰をか
けた。そして、ぼくはボウモアをオンザロックで、
マリコはキールを注文した。
「この前はありがとう。なんだか元気がなった
わ。」

「どういたしまして。でも君が指定市以外の市町
村が占用許可を代行した場合における道路をまた
がる物件の占用許可について興味があるというの
は意外だったな。」

「そうね。そもそもなんだかよくわからないけど、
そういう特別なものってなんだかほっとけないの
よ。」とマリコは言った。

「まあ、簡単なことさ。」

ぼくはマスターからマドラーを二本借りた。そ
して、カウンターの上に平行に置いた。それとほ
ぼ同時に二人のコースターの上にそれぞれグラス
が置かれた。

「君のセーターの色と一緒だね。」と僕は言った。

「この右側の棒が歩道で、左側の棒が車道だとし
よう。歩道を代行している場合は、車道について
は、占用の権限はない。でもほら、例えば、こうし
てそれぞれにまたがるような物件があるとすると、
さて都道府県が指定市以外の市町村かどちら
の占用許可をとればいいでしょうか。」

「難しいわね。でも両方からとるのはバカバカし
いしわね。いかにもお役所的じゃない。」

マリコはマドラーの上に載せた二つに折った紙のナプキンを持ち上げ、それを指の上で器用にくるくる回しながら、難しそうな顔をつくった。

「そういうことは占用者の視点に立って考えないといけない。つまりね、本来道路管理者に一元的に行わせるという措置が妥当なんじゃないかと考えたんだ。だから、またがるものについては道路管理者に留保することにした。」

「なるほどね。みんなのこと考える道路管理者ってなんだか素敵ね。それは、そうと、あなたはいつもウイスキーを頼むのね。」

「うん。そうなんだ。こういうところではシングルモルトと決めている。ピュアな感じがいい。そして、なんととっても指定市以外の市町村に似ている。歩道の新設等の一部しか道路事業ができないのに、地域住民の日常生活の安全性、利便性の向上そして快適な生活環境の確保を図ろうとしている。そんな感じがするんだよ。そこにはつねに新しさと同様さみたいなものを感じるんだ。自動車の交通の発達を前提に構成されている、いや、少なくともそのように構成されたと考えられていた道路法に新しい価値を与えた。でも、実はそれは昔から道路法の目的の中に織り込まれていたんだ。だから平成一九年の改正では、目的の改正は行われていない。昔からあったなにかを気付かせてくれる。そんなウイスキーなんだ。」

「私も飲んでみていい。」

「もちろん。いいよ。」

「なんだか懐かしい香りがするわ。」

「それは、ウイスキーの樽にしみこんだ潮のせいじゃないかな。」

「シオ？」

「そう潮。海の近くに醸造所があるんだよ。スコットランドのなんとかというとても小さい島だね。島の全部が潮風に満ちている。そこでは、牛も海藻を食べるらしい。」

その島の名前は、「アイラ島」であるということとをマスターは教えてくれた。

「なんだか思い出しちゃうわ。」

「確か、君は海辺のまちの生まれだったね。」

「そうなの、よく夕暮れまで浜辺で遊んでいるとお母さんが迎えに来てくれたのよ……。」

マリコはしばらく考え込むような素振りを見せた。ぼくは声をかけようかどうかしばらく迷った。何かを思い出したように、おもむろにマリコが話し始めた。じつとグラスをみつめている。遠くを見つめているようでもあった。

「むかし、海辺の岸壁でかくれんぼしていたとき、私は三角のテトラポットの中に隠れていた。でもね、かくれんぼをしていた男の子たちは、誰も私を見つけてくれなかった。いつの間にか日が暮れて、凄く寒くなった。そしたら、外が暗いから出

るのがこわくなっちゃった。電柱の影がおそってくるくらい長かったの。とても怖かった。そのときばかりは、うちの町はなんで代行したりしなかったりして、電線共同溝を整備しないんだろうと思つたわよ。でも、お母さんが迎えに来てくれたの。そのときのお母さんはとても大きく見えたし、背負ってくれた背中がとても温かかった。」

「この間は、残念だったね。」とぼくはいった。そういつて欲しいんだとぼくは思った。マリコは続けて言った。

「いいのよ。お母さん、とても気持ちよかったです。思うわ。なにしろマンションの屋上から飛び降りたんだもの。四四階建てのマンションの屋上からの東京の夜はきれいだし、きつとその瞬間、死ぬかと思つた嫌なこと、全部忘れちゃったんじゃないかな。指定市以外の市町村が代行業を全部終えて、すっかり権限を都道府県に返しちゃったときみたいに、きれいさっぱり。整備はしたけど、維持・修繕等の管理はもうしませんってね。」

そこまで言うとお母さんはそっと目を閉じた。まつ毛がとても長い。カウンターの隅にいた客はいつの間にかいなくなっていた。店には、ぼくとマリコとマスターの三人だけしかない。マスターは客用のソファーに腰掛けて、繰り返されるテレビのニュースを見ている。しばらくマリコは黙っていた。

「突然だったんだもの。」

おもむろにマリコは話し始めた。

「指定市以外の市町村なら、少なくとも代行するときに公示はするわよね。何しろ管理者が変わるんだから。それがいいのはひどいわよ。そして、お母さんは、指定市以外の市町村が代行して拡幅する必要もないくらい広い歩道に落ちたの。アスファルトはきつと凄く冷たくて、お母さんは影も形もないお母さんになっちゃった……。わたしを守ってくれたお母さんは今はいない。」

マリコは声を詰まらせながら続けた。

「指定市以外の市町村が発見するまで、お母さんはたった一人でそこにいたの。結局、そこは指定市以外の市町村が代行して維持していた歩道だったから、発見したのも片付けたのも指定市以外の市町村だった。」

マリコはひどく混乱しているようだった。ぼくはマリコの肩にそっと手をまわし、マリコの肩を引き寄せた。

「もういいんだよ。結局指定市以外の市町村が整備後も維持を行うこともあるし、維持だけを行うこともある。亡くなったお母さんはもう君の事を維持できないなら、ぼくが代わって維持するだけ。」

「ぼくが代行するよ。」とぼくは言った。

その夜、ぼくはマリコを改築した。そして、ぼ

くたちは付き合うようになった。最初はぎこちなく、指定市以外の市町村の話くらいしか共通の話題はなかった。

「シャンプーの香りがするね。」とぼくは言った。

「そう、シャワーを浴びてきたの。四階でどこかの局の大臣レクが始まる頃、わたしは地下一階でシャワーを浴びるの。どうせ誰も来ないから、脱衣所で服も下着も乱暴に脱ぎ捨てて。でも体はゆっくり根気よく洗う。最後に目をつぶって、じつと熱いシャワーをしばらく浴びるの。そうするとね、どこかのタコ部屋の一年生のことが頭に浮かぶの。大臣室から電話がきて、慌てて上司が忘れた資料を届けに行くイチネンセイ。カレ、もしかしたらカノジョかもしれないけど、カレは階段を一段飛ばしで駆け上がっていく。」

「でもやり直しだね。イチネンセイは言われた資料を間違える生き物だから。」

「そう、でもそれも届けてから気付くよ。」「これじゃねえよ」って頭ごなしに言われてね。結局、もう一往復する。最初は凄く焦るの、自分のミスと自分の人生を考える。でも、局にもどって、最後にもう一度四階に着くとき、そのときのカレの心は本当に純真なものよ。早くなんとかしたい。それだけ、まるで、ガンジス川をそこが海だと思つて泳いでいるイルカのように、無垢なの。そし

て、資料が届き終わった頃、私もシャワーを出る。鏡の前に出て自分の体を見つめるの。カレのように、イルカのように今日一日も純粹でいられるように体の隅々まで自分を見つめるの。」

「息の詰まる議論が展開される大臣室、走り回るイチネンセイ、鏡の前の裸の女。それがこの省の朝か。」

「そして私は静かに席につく。そして、資料の間からあなたを覗き込む。ほどなく、あなたが夢から目覚めるの。また、新しい一日が始まるのよ。」

「ジャガイモのようなぼく。」

「ジャガイモのようなあなた。」マリコは確認するように鸚鵡返した。

「そして、記念碑的な恋。」

「記念碑的な街灯。記念碑的な街灯を一本だけやるのは、市町村が代行するより、占用させちゃったほうが手続きは楽よね。代行はなにしろ歩行空間の整備という面的な整備を前提に考えているんですよ。でも附属物は車道でも整備できる。」

「そうだね。複雑で、そして不完全な存在ね。指定市以外の市町村って。」

ぼくたちはしばらく見つめ合い、ぼくはここに決めていたこと、あるいはいつか言わなければいけないと思つていたことを言うことにした。

「ぼくも不完全なんだ。完全な管理はできないかもしれない。君を管理するということはとてつ

今月のまとめ

なく難しいことかもしれないからね。とくに改築や修繕、とりわけ災害復旧は難しいかもしれない。でも維持やその他の管理はきつとできるし、それだけでも君はとてステキでいつづけていてくれると思うんだ。だから、ぼくと結婚してくれないか。ぼくは君にとつての指定市以外の市町村でありたい…。」

マリコの頬に涙がたつたっている。マリコは拭おうともしない。ぼくはマリコの気持ちはどこにあるのかわからなかった。不安はあったが、でも、なぜか後悔はしていない。クリスマスの朝に道路法の資料に囲かこまれながら言う言葉でもないような気もしたが、でも…。

「ありがとう。とてもステキなプロポーズね。きつと一生忘れられないわ。」

そいうとマリコは静かに目を閉じた。ぼくたちは静かにキスをした。

ぼくは指定市以外の市町村が設置した並木にとまり、そこから羽化する季節はずれのアゲハチョウのことを考えた。

○権限の代行は、いわゆる代理又は委任とは異なる。代行者は法律の規定により、一定の事務を執行することとされたとき、道路管理者の権限のうち、当該事務の執行に必要なものを行うことができる。したがって、①代行者が代行する権限は道路管理者が行使できない。②道路管理者は代行者に対する指揮監督権を有しない。したがって、両者の間には権限の調整の問題が生ずるにすぎない。③代行者は代行する権限の範囲内で道路管理者と同一の地位にあるため、罰則の適用については代行者をもって道路管理者とみなすこととされている。

○市町村が国道又は都道府県道において歩道の新設等を行った後の、当該歩道等の敷地の帰属については国道の場合は国に帰属し、都道府県道の場合は代行するかしないかの協議の時にあらかじめ決めておくべきである。

○市町村が道路法第一七条第三項の規定により歩道の管理を行う際、占用許可の権限を代行するときに、歩道等と車道をまたがる占用物件の許可については、占有者の利便の確保を図る観点から、道路管理者（都道府県）に留保しておくべきである。

○道路法第一七条第三項の規定により歩道の新設

等は、地域住民の日常生活の安全性、利便性の向上そして快適な生活環境の確保を図ることを目的におこなわれるものであるが、これは道路法のある道路網の整備の範囲内のものである。また、このような目的でもって行われる歩道の新設等は、故にある程度の面的な広がりをもった整備であることが望ましく、街灯を一本だけ整備するような、単発での整備については占用等のその他の道路法の手続きを用いた方が合理的であること。

○指定市以外の市町村は、電線共同溝の整備も代行できる。

○指定市以外の市町村は、自ら整備していない指定区間外国道及び都道府県道の維持・修繕についても行うことができること。ただし、災害復旧については代行することはできないこと。